

「今、私の晴雨計は！」⑤

「イタリアで考えたこと

―脱線して済みません―

平山 征夫

二五〇〇年続いたチビタが減びようとしている姿があまりに強烈だったので、地方消滅も空心村も仕方ないかという気になったが現実はどうはいかない。何とかしなくてはならない。知事時代の私の発案で始まった地域おこしイベント「大地の芸術祭」も九月中旬に成功裏に終了、三年後の七回目開催も決まった。更に工夫して「交流人口・準定住人口増」にもっと結びつけられればと願っている。それにしても何処にでも中世の街並みが残り、観光資源に事欠か

ないイタリアの田舎は羨ましい。だからといってそれに付けこむようにバスが街に入ると「入都税」なる税まで徴収する近年の値上げぶりは感心しない。

ついでに今回の旅行での面白かった話をしよう。天気男の私は今回もずっと天気にも恵まれたが、幸い添乗員さんにも恵まれとても快適な旅を送った。その添乗員さんが長年の経験の中から信じがたい話を二つ聞かせてくれた。面白いので披露する。その第一：・旅行中の脂っこい食事に飽きてきた頃、あるご夫婦から「素麺を作りますから食べに来てください」と誘われ、勇んで部屋にお邪魔してみた。何と素麺はビデの中に浮かんでいた。まだ日本人にビデが珍しかった時代、丁寧にその役

割を説明し、素麺は洗面所に流して貰ったそう・・・。

その第二：ツアー参加者が成田に集合してみたら、静岡から参加の五人が服装はちゃんと男なのだが言葉は明らかにいわゆる「おねえ」。

それに対しある夫婦が「この人たちと一緒に嫌です。遠慮してもらってください」と強硬に主張。ほかの参加者が「この人たちの店に飲み行けば高い金をとられるのにタダで相手してくれるんだからいいじゃない」と説得をしても不調。かといって帰す正当な理由もなく一緒に旅をしたのだが、五人のブロが話術の限りを尽くして介入するも、旅の最後まで口をきかなかったそう・・・。

脱線ついでにもう一つ。今回私は新潟から旅行仲間の男三人で参加したが（通常は奥方同伴である）、ほかは殆ど夫婦連れ。初めは不思議そうに我々を眺めていた奥様たちが、旅の二日目ともなるとそろっと寄ってきて「男性だけの参加って珍しいですね。どういうお仲間？何処から来られたの？」と質問攻め。少しふざけて私が「新潟の老人ホームからです」と答えると、「ご丁寧に「身なり、雰囲気からして高級有料ホームですか」と来た。そこで思った。今度同じ場面にあつたら「我々三人は昔おねえだったのですが、今は引退して老人ホームと一緒にいるのです」と答えようと・・・。